

## 15歳以下の孤立性僧帽弁疾患における僧帽弁手術の遠隔期成績

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久米, 悠太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20780/00032085">https://doi.org/10.20780/00032085</a>

## 主論文の要旨

15歳以下の孤立性僧帽弁疾患における僧帽弁手術の遠隔期成績

東京女子医科大学心臓血管外科学教室

(指導：山崎健二教授)

久米 悠太

日本心臓血管外科学会雑誌 第45巻 第4号 154頁～160頁（平成28年7月15日発行）に掲載

### 【要旨】

小児期には可及的に弁形成術を行うことが望ましいが、やむを得ず弁置換術となる症例が存在する。15歳以下の孤立性僧帽弁疾患に対する僧帽弁形成術、機械弁置換術の遠隔成績を検討した。1981年1月から2010年12月までに当院で僧帽弁形成術を行った30例(P群及び機械弁による僧帽弁置換術を行った26例(R群))を対象とした。P群、R群共に周術期死亡例はなく遠隔期にR群で4例を失い、再手術はP群で6例(うち残存逆流5例)、R群で5例(うちサイズアップ3例)に認めた。脳関連合併症は両群とも遠隔期に1例ずつ認めただけで、人工弁感染は認めなかった。10年時での生存率はP群100.0%、R群88.0%であり有意差が見られた。10年時での再手術回避率はP群77.6%、R群77.0%、10年時における脳関連合併症回避率は共に100%であり有意差は見られなかった。当科における僧帽弁形成術の成績は、術後早期に僧帽弁置換を余儀なくされる症例が存在するものの、その高い生存率と低い脳関連合併症率から、遠隔成績はおおむね良好であると言える。また、遠隔期の再手術回避率には懸念が残るものの若年期における僧帽弁置換術の成績としては、懸念されていた機械弁による脳関連合併症の発生も少なく許容されるものと考えられた。孤立性僧帽弁閉鎖不全症に対する僧帽弁形成術、僧帽弁置換術の遠隔成績は良好であると言える。